

## 中国「教育の改革開放」から 40 年 中国の学生は何が変わったのか？

### ◆中国の改革開放

今回は「留学生通信」と言いながらも中国のことに絞ってお送りする。他の国の皆さんには申し訳ないが、他の国を軽視しているわけではないので、ご理解願いたい。

中国が「教育の改革開放（教育改革與發展）」を行って 40 年になる。この「教育改革開放 40 周年記念式典」が 10 月 6 日に北京で、10 月 8 日に兵庫県神戸市でそれぞれ行われた。中国における改革開放とは、日本では経済のことばかりを言うことが少なくない。改革開放政策を行った鄧小平は、もともと毛沢東が政権の中枢を担って進めていた「大躍進政策」「文化大革命」を否定的に考えており、毛沢東の時代に考え方が合わなかったことから、一度失脚を仕掛けたことがあるほどである。しかし、毛沢東に「まだ若いから見どころがある」と言われた鄧小平は、その後、毛沢東の下で雌伏の時を過ごす。そして、自分が国家主席になった時に、経済の疲弊を立て直すために「改革開放政策」を推進することになるのである。

この改革開放政策は毛沢東の死後、華国鋒が「すべての毛主席の決定は断固守らねばならず、すべての毛主席の指示には忠実に従わなければならない」という「二つのすべて」の理論が主流を占めていたが、鄧小平の時代になって、徐々に毛沢東からの脱却を考え、中国の発展を目指す人々によって提案された。その中で鄧小平は 1978 年の中共第 11 期三中全会において「四つの近代化」を最重要課題と位置づけ、①まず国民総生産（GNP）を 1980 年の 2 倍にする、②20 世紀末までに GNP をさらに 2 倍にし、国民生活のある程度裕福な水準に高める、③21 世紀半ばまでに GNP をさらに 4 倍にし、中進国の水準にする、という 3 段階で実現を目指すということをその計画に盛り込んだのである。

日本では中国が平等主義を捨て、先に豊かになれるところから豊かになり、結果的に全員が豊かで平等な社会になればよいという「先富論」を基本原則とし、「手段としての市場経済」を導入することになったということが大きく取り沙汰された。現在、日本に来ている中国の留学生はあまり記憶がないと思うが、当時、中国は世界の最貧国の中の一つであり、北京市内は自動車の姿はほとんどなく、多くの人が同じ服装である「人民服」に身を包み、朝には「自転車」が現在の自動車よりも渋滞するほどの混雑で、人々の通勤する風景が象徴的であった。しかし、その中で「改革開放経済」に則り、農村部では人民公社が解体され、生産責任制、すなわち経営自主権を保障し、農民の生産意欲向上を目指し、また、都市部では

外資の積極利用が奨励され、沿岸部諸都市に経済技術開発区が設置されるようになったのである。

鄧小平は、このことを実現するために、1982年に出された現行の中華人民共和国憲法（その後、数回改定あり）の前文の中に、「中国の各民族人民は引き続き中国共産党の指導のもと、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の誘導のもと、人民民主独裁を堅持し、社会主義の道を堅持し、たえず社会主義の諸制度を改善し、社会主義的民主を発展させ、社会主義の法制度を健全にし、自力更生、刻苦奮闘、工業、農業、国防、科学技術の近代化を逐次実現し、わが国を高度の文明と高度の民主主義をそなえた社会主義国家に建設するであろう」と記載し、単純に市場経済の導入だけではなく、「社会主義の維持」と「科学技術の近代化」そして「諸制度の改革」を主張したのである。

### ◆教育の改革開放と第一期留学生

市場経済への移行の話ばかりになってしまったが、この1978年の三中全会における改革開放経済、「四つの近代化」に基づき、鄧小平は翌年から、さっそく「社会諸制度の改革」に乗り出すことになる。

冒頭に紹介した「教育改革開放40周年記念式典」は、中国では10月1日から始まる国慶節の長期休暇の真ん中という、本来ならば旅行などに行っているであろう時に、北京で式典を行うというのは、どうしても奇異に思う人も少なくない。中国をよく知っている人ならば、一年のうちでメーデーと国慶節だけは、人民のお祭りであり、何をおいても休暇を取るのが普通であるのかかわらず、共産党主催の式典を北京で行うことを奇異に感じるであろう。これはちょうど今から38年前の1979年10月6日、北京から共産党のチャーターした旅客機に乗った第一期の海外留学生がまさに中国を飛び立って初めて「留学」した記念日なのである。そのために長期休暇を辞退しても、式典に多くの人が集まった。未だに海外において活躍している人が少なくなく、このため北京に戻ってこられない人を除いて、中国に在住の「第一期留学生」約100名がこの式典に集まった。そして、その次の日曜日である10月8日に、世界で活躍する人のために、第一期留学生に最も多かった留学先である大阪に近い神戸で改めて式典が行われたのである。

この第一期の留学生は、多くは法律・経済・農学・科学の留学生が多かった。しかし、第一期生の人に話を聞いてみると、「1978年まで、海外の勉強道具や教材は全く中国では手に入らず、共産党の決めたものでしか勉強することができなかった。その教材の内容が最先端であると思っていたし、その教材で勉強した中で成績優秀者が選ばれて留学したのです。しかし、共産党の教材では、日本をはじめとした留学先で全然役に立たず、言語においても全く分からなかった。経済的にも非常に貧しく、日本語を勉強し、アルバイトで自分の生計を立て、そのうえで毎日勉強をしなければならない。かなり大変でした。しかし、そんな生活の苦勞よりも、何よりも驚いたのが、北京で勉強したことが全く役に立たないという勉強の

質と内容の差の大きさでした」と言う。

当時は「国費留学」であったので、学費などはすべて国、それも日本が負担していて、本国との移動手段も中国共産党政府が出したのであるが、しかし、生活で日常的に必要なものは、すべて自分でそろえねばならず、参考書やそのほかの副読本などもすべて自分で買っていた。そのためにアルバイトもかなりやらなければならなかったという。このような状態の中、第一期生は「文系の学問は、それでも全く違うということをゼロから学ぶことができると思えばよいので良かった。考え方の基本が中国的思考の基礎から、民主主義的な思考に変われば文系というのは何となくできるもの。しかし、理系というのは、一つの基本の上に次の論理が出てくるものですから、そこの域に達していない中国の理数系留学生のほとんどは、挫折をしてしまうかあるいはもっと勉強しなければならないと思って、そのまま中国に帰ることなく、その国の企業に就職し未だに勉強や研究を続けています。当時中国と日本をはじめとした外国では、それほど差があったのです」ということを言っている。

このように当時留学した人のほとんどが、留学先の国にそのまま居ついてしまい、研究者や会社員として残ってしまうために、「留学生としての出国」と「卒業しての帰国」を比較すると、中国においては出国数が多かった。これが 2014 年になって初めて「帰国者の方が多くなった」ということに現在の中国の人々、特に政府の人々は喜びを感じたようだ。「帰国者が多くなったということは、第一期の人々が定年になって故郷に帰ってきたということと、もう一つはそれだけ中国の国内でも最先端のことが学べ、なおかつ海外で研究した内容を生かせる職場ができてきたということ。つまり、中国国内もその留学生が帰国した職場で使えるくらいに発展してきたということなんです」（第一期生の一人）というような声が聞こえてくる。ある意味で、留学生が中国の発展を支えてきたということには間違いがないのである。

#### ◆留学生に送る李克強首相の言葉

このように「留学生」が国家の発展に寄与できるのは、鄧小平という政治家が、このことを見越して、「社会制度の改革がなければ経済の改革がない」ということを提唱し、そのことを至上命令として憲法の前文にその精神を盛り込んだことである。現在の日本の政治のように、経済といえば経済だけ、留学といえば留学だけ、それも各省庁が縦割りで全く連携が取れていないというような状況ではなく、まさに国を挙げて、憲法まで変えて国家の発展を留学生に託すという姿は、日本の政治にも大いに参考にしてもらいたいところである。また、そのような政治の姿勢が、その時の留学生に通じ、そして貧しくても苦学であっても頑張るというような状況を作り出しているのではないか。

「苦学であったから勉強できないなんて言うのは嘘です。私たち第一期生は、苦学していたからこそ、勉強に打ち込めた。国のため、未来のため、そして将来の自分の生活のため、そういえば、その時の苦労は何のことはない。そういうつもりで現在の日本で勉強している

留学生に頑張ってもらいたい」と、このように話すのは第一期生の一人である。ちなみに、本文では匿名にしているが、この中で話してくれている人は中国の社会ではもちろんのこと、世界的にも各分野で活躍し、有名になっている人々ばかりである。

そして、この第一期生と「同期」には、現在の中国の李克強首相がいる。李克強首相が北京大学の法学部であった時の同級生の一人は日本で留学し、病院の病室の一室を好意で貸してもらって下宿し、苦学をしていた人でもある。

最後に現在の留学生に向けてということで李克強首相が、その人ではないが、当時留学生の第一期生に宛てた「留学する友人への手紙」の中から一部を抜粋したい。

「日本人は向上心に富んだ民族です。日本に行ったら専門分野ばかり学ぶのではなく、日本の民族精神と文化背景について学ぶことに更に多くの時間を割くべきです。日本人は常々、東西の文化を有機的に結び付けたことを誇りにしていますが、日本人はどのようにしてそれをやったのでしょうか。これについては理性的に研究するばかりでなく、感性をもって知ることが大切です。君は自分の視界に限界を設けていけない。視界を広げ、世界レベルから見なければならない。我々の前の世代が外国に赴いたのは、利益を得るためや学位をとるためではなく、真理を求めていたのです。私たちの世代にもしこのような真理を求める考えがないならば、あまりにも悲しい。

日本は学ぶ価値のある国です。しかし、民族を絶滅しようとしたあの戦争のことを忘れてはいけません。歴史の教訓を汲み取るというのは決して復讐のためではなく、歴史が繰り返されること防ぐためです」

これが、当時社会人一年生であった李克強が友人に宛てた日本に留学するにあたって送った言葉である。現在の留学生もこのような志をもって、日本で勉強を行ってもらいたいと思う。